法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

福田敏彦教授のご退職にあたって

KOMIKAWA, Koichiro / 児美川, 孝一郎

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
8
(開始ページ / Start Page)
23
(終了ページ / End Page)
25
(発行年 / Year)
2011-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007387

Hosei University Repository

福田敏彦先生退職記念

福田敏彦教授のご退職にあたって

法政大学キャリアデザイン学部長　児美川　孝一郎

本学部の創設期から長く教鞭をとられてきた福田敏彦先生が、今年度をもって退職されることになりました。誌面を借りるかたちではありますが、教授会を代表して、ひとこと感謝の言葉を述べさせていただきます。

福田先生が着任された2004年度は、本学部の創設２年目に当たります。しかし、実際には、設置準備委員会の時からさまざまに交流させていただき、開設された2003年度にも、学内イベントや法政大学キャリアデザイン学会の研究会等にご参加いただいていましたので、実質的には、先生は本学部の創設メンバーのお一人であると申し上げてよいと思っております。

以来、少ない人数で、しかし「志」をもってはじめたこの学部において、講義やゼミはもとより、校務においても、先生には大変に重要な役割を担っていただきました。今でこそ教員数も増え、学部創設の頃を知らない教員も着任するようになりましたが、当時をよくご存じで、他のメンバーともども学部を引っ張ってこられた先生の存在は、今年度から分不相応にも学部長という重責を引き受けてしまった私のような者にとっては、本当に心強いものでした。

また、広告やメディアを対象とされる福田先生の講義は、学生たちにも人気があり、いつも大教室を使用されていました。当然のことながら、毎年、福田ゼミを志望する学生は多数にのぼり、学部のなかで最も志願者が集中する人気ゼミのひとつであり続けたことも特筆に値しましょう。そういう意味で、先生は、仕事の面で学部を支えてくださっただけではなく、学生に対する学部の

Hosei University Repository

「顔」としての役割を担っていただいたと言えると思っております。

失礼を覚悟のうえで、個人的な印象を述べさせていただくと、遠巻きながら私が拝見していた福田先生は、「狭間を生きる人」であったように思えてなりません。これには、二つの意味があります。

ひとつは、先生が民間企業のご出身で、長年の勤務経験を経て、大学の教員になられているということです。実務の世界と研究・教育の世界の「狭間」。二つの世界を渡ってこられた先生ならではの発想や視点は、アカデミックな畑しか知らない教員には、いつも新鮮で刺激的であり、私自身、多くのことを学ばせていただきました。

もうひとつは、学部のカリキュラムにおける経営分野と文化分野の「狭間」ということです。ご担当の講義科目「マーケティングと文化」に象徴されるように思いますが、文化という領域の事象に人文学的なアプローチで迫るのではなく、経営学的なマーケティングの観点からの理解を試みる。こうして二つの研究領域の境界に立つこと、両者の方法論をコラボレートさせることによる視点のユニークさや、特徴的なご研究の内容が、先生の真骨頂であられたように見えます。

言うまでもなく、キャリアデザイン学部は、複数の学問的バックボーンを持つ学際的な学部です。「学際的」ということは、多様な視点や方法論に基づいて、幅広く豊かな研究と教育が展開される可能性を生むものであると同時に、ややもすると、全体が個別の領域や分野へと分解してしまう危険性をも孕んでいます。振り返って見れば、学際的な本学部にあって、あえて二つの領域の狭間で研究・教育をされてきた先生の業績は、本学部がまとまりを持った、学際的であることの利点を生かした学部であり続けるうえでも、多大な貢献をなされたものと考えております。

私などが申し上げるのはおこがましいことですが、「狭間に生きる」ということは、容易いことではありません。周囲からなかなか理解されないと思われたことも、意図せぬ誤解を受けたように感じられたことも、おありだったかもしれません。それでも、その立ち位置を不動だにせず、ご自身の信念にしたがってこられた福田先生だからこそ、学部の創設時から一貫して、学部のカリ

Hosei University Repository

キュラムをめぐる論議の際などには、キャリアデザイン学という新しい枠組みを創っていくことの必要性を力説され、ご自身の研究・教育において、そのモデルを創ろうと奮闘されてこられたのだと理解しております。

その「意気」と「志」は、ぜがひでも残った私たちで引き継いでいきたいと考えます。

最後になりますが、福田先生のますますのご活躍とご健勝を祈念いたしまして、これまでのご貢献に対する感謝の言葉とさせていただきます。